

1983. 7

愛鳥教育^{NO.10}

愛鳥教育研究会

今日の野鳥は、明日の人類であるとか

愛鳥教育研究会会長

田村 活三

環境問題のどこをとらえてもゆゆしいことばかりである。

学校教育の場においても、前号の本誌の巻頭言において、わが愛鳥教育の指導を担当して下さる（財）日本鳥類保護連盟の松田道生氏は「愛鳥教育で校内暴力はなくなるか」と、憂えております。まことに手痛いご指摘で、教育者のはしくれであったものにとって断腸の思いであり私も同感です。

教育現場の荒廃は何としてもこれを改めなければなりません。やはり私は、現代の教育は愛情の欠如から来ていると思います。されば、このゆがんだ教育を正すには、愛情をつちかう教育である私たちの教育が一番近道で、愛鳥教育をやっているれば校内暴力はなかったと私は言いきります。

幸い（財）日本鳥類保護連盟においても第一義的に愛鳥教育を育てると本年度の方針を打ち出しています。

今こそ野鳥を愛し自然を守る愛鳥教育を全国にもっとおし広めていただきたいと思えます。

連盟のご期待にそう意味においても皆さんいっそうの努力をお願いいたします。

NO.10 愛鳥教育

1983. 7

目次

巻頭言	田村活三	2
昭和58年度愛鳥教育研究会総会		
初夏の日光にて開催		4
日光に広がる愛鳥教育	大橋一成	5
探鳥会の記録	石橋寿春	6
意見交換会の記録	梅本 登	8
愛鳥講座Ⅲ・愛鳥教育の計画1	下田澄子	9
愛鳥講座・探鳥会とその計画	松田道生	14
愛鳥モデル校指定数		20
愛鳥活動のヒント・2	柴田敏隆	22
青梅市の巣箱コンクール		23
夏季研修会のお知らせ		23
編集後記		23

愛鳥教育 No. 10

昭和58年7月1日

編集人 松田道生

発行人 田村活三

発行所 愛鳥教育研究会

住 所 〒150東京都渋谷区宇田川町37-10

渋谷レジデンシャルオフィス405

(財)日本鳥類保護連盟内

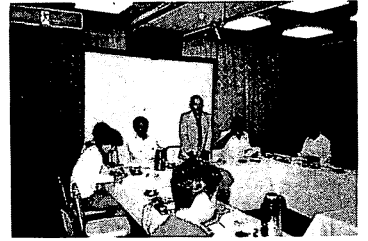
電 話 東京03(465)8601

郵便振替 東京2-92041

制 作 かなえ書房

昭和58年度愛鳥教育研究会総会

初夏の日光にて開催



田村会長のあいさつ

4年目を迎えた愛鳥教育研究会の本年度の総会は、昨年に続き日光レークサイドホテルで行われました。各地から現場の先生をはじめ関係者30名が、ご出席されました。

総会は、6月4日(土)午後1時30分に東武日光駅に集合、実際の会合は夜7時より始まりました。田村会長のあいさつに引続いて、日本鳥類保護連盟の一瀬事務局長のあいさつ。さらに昭和57年度の事業報告を石橋常任理事、昭和58年度事業計画を下田常任理事、会計報告を連盟の高橋早苗、監査報告を江袋監事にいただき事務的な手続きを終わりました。

この他、教職を退職されたことにより辞意を申し出されている早崎常任理事の後任と、若い人を常任理事に入ってもらい、より活動を活発にすることを常任理事会に一任していただくことを、拍手をもって承認していただきました。

この後、地元日光市立中宮祠小学校の大橋先生から「愛鳥活動と愛鳥意識の高揚」と題して中宮祠小学校の愛鳥活動の実際をスライドをまじえて発表していただきました。中宮祠小学校では地域ぐるみで父兄が実なる木を植えたり、児童会を中心にあらゆる面から活動し、中でもシジュウカラの食性研究では1巢育て上げるのに虫を6000匹も捕獲すると発表されました。

続いて梅本常任理事の司会で討議に入り山形県小国町立北部中学校の斉藤先生より愛鳥教育活動の進め方について発議があり、各参会者よりアドバイスをはじめ、同様の悩みをうったえる意見があり、時間をオーバーして話し合いがされました。

翌5日は、環境週間の初日でもあります。午前5時に集合したのち、中宮祠小学校の大橋先生の案内で、小学校の周辺を探鳥し、センダイムシクイやエゾムシクイの声をよく聞くことができました。また、午前中から午後にかけては戦場ヶ原(湯滝→赤沼コース)でノビタキやホオアカナなど草原の鳥たちを楽しみました。

お集りいただきました方々、本当にご苦労様で

した。また、日光レークサイドホテルの方々、お世話になり誠にありがとうございました。誌上をお借りして、あつくお礼申し上げます。

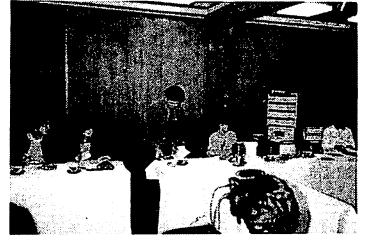
参加者名〔順不同〕

坂井武夫(元渋谷区立大和田小学校)
阿部英雄(日本野鳥の会富士宮支部支部長)
平田寛重(伊勢原市立高部屋小学校)
小田 茂(神奈川県自然保護課)
石堂正行(日野市立第1中学校)
斉藤 隆(小国町立北部中学校)
千葉弘道(町田市立南第4小学校)
千葉芙美恵(町田市立南第3小学校)
梅本 登(五日市町立戸倉小学校)
石橋寿春(世田谷区立船橋小学校)
高橋昭彦(世田谷区立船橋小学校)
五十嵐光春(世田谷区立船橋小学校)
江袋島吉(元世田谷区立二子玉川小学校々長)
田村活三(元青梅市立青梅第5小学校々長)
大橋一成(日光市立中宮祠小学校)
皿井 信(豊橋市立青陵中学校)
大日向政子(日本鳥類保護連盟会員)
野田たか子(寄居町立男衾小学校)
藤田智子(日本鳥類保護連盟会員)
角田節子(世田谷区立八幡小学校)
小野寺ふみ子(世田谷区立八幡小学校)
下田澄子(元五日市町立戸倉小学校々長)
大串敬子(日本鳥類保護連盟会員)
鈴木裕代(世田谷区立二子玉川小学校)
那須智加子(足立区立梅島第1小学校)
一瀬鉄哉(日本鳥類保護連盟事務局長)
松田道生(日本鳥類保護連盟主査)
斉藤一紀(日本鳥類保護連盟職員)
高橋早苗(日本鳥類保護連盟職員)
宗形 康(日本鳥類保護連盟職員)

日光に広がる愛鳥教育

栃木県日光市立中宮祠小学校

大橋 一成(発表)



大橋先生の研究発表

昨年度の全国鳥獣保護実績発表大会で林野庁長官賞を受賞した日光市立中宮祠小学校。中宮祠小学校は日光市の中心から西へ約20km、第2いろは坂を登り標高1,300 mの位置にあります。男体山の麓にあり、校地を出ると針葉樹林や広葉樹林が広がり、野鳥のよすみかとなっています。児童たちは男体山を毎日ながめながら、そして野鳥の声を聞きながら生活しています。

12年前から巣箱架けを行ってきた中宮祠小学校が学校全体で愛鳥活動を始めたのは、学校の教育目標が「心が正しく豊かな子ども」になった昭和53年度からです。以後、野鳥の食べる実のなる木を植えたり、巣箱コンクールに参加するなど、野鳥をかわいがる活動を続けています。

愛鳥活動は児童会集会委員会が中心になり、全校生が協力して行っています。以下に愛鳥活動のねらい(具体目標)をあげます。

- (1) 学校や家のまわりの生き物をかわいがる。
- (2) 野鳥や動物植物のことについて調べ、みんなに知らせる。
- (3) 学校のまわりを花や緑で美しくする。

愛鳥活動の実際

学校の5ヵ所に学年コーナー(1・2年は合同、3,4,5,6年の各コーナー)に餌台を作り、餌や水をあげています。餌は給食の残りや各家庭から持ち寄りしています。また「お父さんお母さんお願いします」と各家庭に餌台の設置を勧めるパンフレットを児童会が発行しました。その効果があつてか、餌台を作って餌をあげている家庭が15件、餌台はないが餌を時々あげている家庭が65件もあったことは、児童たちの喜びでした。

児童たちが飼っていた小動物が死んだり、路上で野鳥が死んでいると、以前は校舎の裏に葬っていました。児童会が中心になり、山菜採りやアルミ缶の回収(児童への愛鳥の意識づけということで効果は大でした)などで得たお金で、生き物のお墓“やすらかに”を作り、今はそちらに埋葬し

ています。また、傷ついた野鳥の世話も行っています。愛鳥意識が高まっていることの表れです。

野鳥を大切にすることはわかっていても、なぜ野鳥を大切にするのか、という疑問がありました。校内のシラカンバの木に架けた巣箱にシジュウカラが営巣したので、1日にどのくらいの毛虫をヒナに与えるのかを調べてみました。1日平均331匹、ヒナの巣立ちまでは6,000匹以上の毛虫を与えていることがわかりました。野山には多くの野鳥が生活していますから、それらがとる毛虫の数はばく大なものになります。野鳥は森林の守り神なのです。このことを「野鳥をかわいがりましょう」というパンフレットで紹介し、各家庭や観光客にまで配布し、野鳥は大切にしてもらおうようにしています。

ある児童の家に営巣したキセキレイのヒナが巣立ったので、その巣材を調べてみました。コケ類草の根、小枝などを合計719本も集めて、苦労して巣を作っていることがわかりました。巣を壊したり、いたずらをしてはいけないという意識づけにつながりました。また、調べてみると46人の児童の家で野鳥が営巣していることがわかり、皆大事に見守っているようでした。

野鳥コーナーの設置や探鳥会などにより、野鳥を知っている児童も多くなり、愛鳥の意識を高めるために各学年のシンボルバードを決めています。

学校のまわりを花や緑で美しくする、ということで毎年シラカンバの木を植え、花壇や栽培園などには野鳥の食べる実のなる木を植えています。

今後ともこれらの活動を続けていき、児童たちだけでなく、家庭や観光客など一般の人たちにも愛鳥活動の大切さをわかってもらい、協力していただけるようお願いしています。

発表された大橋生先は今年度から活動を始められたばかりの方です。児童たちとともに愛鳥活動の輪をよりいっそう広げていっていただきたいと思っています。

探鳥会の記録

世田谷区立船橋小学校

石橋 寿春

今回の総会は研修会も兼ねております。スケジュールの中で研究発表と探鳥会がプログラムに入っています。ここでは、3回の探鳥会の記録を詳しく述べます。これから修学旅行や林間学校で、同コースを通る時の参考にして下さい。また、去年記録された鳥とほぼ同じなので1種ごとの説明は「愛鳥教育No.7」を参照していただければ幸いです。

光徳牧場周辺〔6月4日午後2時～3時〕

東武日光駅に着き、さっそくホテルのマイクロボスで光徳牧場へと向かう。昨年は駐車場でアカゲラの歓迎を受けたが、今年はニュウナイスズメが迎えてくれた。林の中ではハシボソガラス、ハシブトガラスが多く、他の鳥に影響があるのではないかと少し心配になった。しかし、ウグイスやコガラ、シジュウカラの音がしばらくするとよく聞こえてきてひと安心。また遠くでツツドリの声も聞こえてくる。頭の上で美しい囀りがする。姿をさがすとニュウナイスズメだ。

ホテルに入る時間がせまったため駐車場へもどると、空高くイワツバメを見つけ、その中にサシバを発見する。

双眼鏡で見上げると「キンセーだ」キンセーというのははどんな鳥だったかな、と考えていると「金星という星ですよ」ということで一件落着。

天体にもくわしい人が参加しているのです。(この夜は、フィールドスコープで土星の輪も接近遭遇)

ホテルに向うバスの中では、録音機を持って来た人が再生して「バスの中にウグイスがいるぞ」と来た。楽しい探鳥会の幕開けになった。

〔確認された鳥〕

ニュウナイスズメ、コガラ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、シジュウカラ、ツツドリ、キジバト、ホオジロ、ムクドリ、ウグイス、カッコウ、サシバ、イワツバメ、キセキレイ、スズメ、ヒガラ、ホトトギス。(17種)

中宮祠小学校周辺〔6月5日午前5時～7時〕

日光の朝はとても冷え込む。昨夜発表をしていた大橋先生に案内していただいて、ホテルを出発。小学校の横を通り、裏の林の方へ向かう。

しばらくササの中を歩くと見晴らしのよい道に出る。耳をすますと、ニュウナイスズメ、ヒガラ、ホトトギスなどがよく鳴いている。

道を下ると、男体山のすそ野が一望に見わたせる場所に出た。こちらから見る男体山は、砂防工事のため、キズだらけといった身体をしている。

ここではキビタキ、エゾムシクイの音が、朝もやの林の中から聞こえてくる。

道からそれて広場に入る。まわりの林からはホオジロ、イカル、トラツグミの音が聞こえてくる。広場いっぱいには大型の動物の足跡があり、シカの親子が何日か前に出て来たらしい。足跡は林に向かってきえていた。

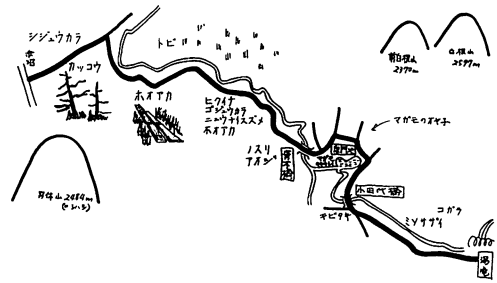
ふたたび林の中に入って行くと、すぐそばでセンダイムシクイが「ショーチュウイッパイ、グイーッ」とやっている。道ばたのわずかな草が咲いていた。早起きは三文以上の得。

中宮祠小学校へもどると、餌台が置いてあったり、丸太で作ったベンチがあった。ここで子供たちとお昼を食べたりするという。また、「野生のサルに餌を上げないで下さい」という看板が立っていた。

また、ホテルへもどって鳥合わせの最中、ゴジュウカラが、目の前の木へ。しばらく中断しなくてはなりませんでした。

〔確認された鳥〕

セグロセキレイ、キセキレイ、ムクドリ、ニュウナイスズメ、イワツバメ、アマツバメ、アカゲラ、ホトトギス、カッコウ、ウグイス、ハシボソガラス、シジュウカラ、ヒガラ、キジバト、キビタキ、オオタカ、トラツグミ、エゾムシクイ、センダイムシクイ、ホオジロ、イカル、カケス、ツツドリ、スズメ、ヨタカ、コゲラ、ハシブトガラス、ゴジュウカラ。(28種)



戦場ヶ原（湯滝—湯川—泉門池—青木橋—戦場ヶ原—赤沼）〔6月5日午前9時～午後2時〕
 いよいよ、今回メインの探鳥会。湯滝を出発して少し行くとヒガラ、シジュウカラが鳴き出す。

道の右側下方に湯川が見えかくれしている。川に出た枝の上でミソサザイが尻尾を立ててさかんに鳴いている。ここでも鳥に歓迎されたようだ。

沢ぞいの道では、カケスや、アカゲラがチラッとしか姿をみせてくれない。多少、欲求不満気味なムードをふきとばしてくれたのがキビタキ、初めは、美しい声でさわりを聞かせ、小田代橋の前では、姿をみせてくれた。黄緑色の葉をバックに、黄色に黒のツートンカラーがはえる。

また、林の中からはエゾハルゼミの声がさかんに聞こえ、その鳴き出し（前奏？）がトラツグミの声のように聞こえ、私たちを悩ます。

泉門池に着くと、キセキレイが2羽、マガモが4～5羽迎えてくれた。マガモは、繁殖期のためエクrips（非繁殖羽。オスもメスのように地味な羽）になっている。奥のアシ原の方にマガモの親子がいて、可愛いヒナを連れていた。キセキレイは、近くに巣があるらしく、さかんに警戒している。いずこも子育てで忙しいらしい。

青木橋の手前の開けた場所で少し早めのお昼をとる。近くの枯木に、アオジ、ニューナイスズメがやって来る。遠くのかん木には、ホオアカ、ノビタキなどが止まり、しばし見られる。

キョキョキョと聞きなれない声がある。ヒクイナの声である。姿はまったく見えず、湿原に入っていく釣り人をにらみながら、聞く。

青木橋を過ぎると湿原の木道の上を歩く。大きな猛禽の出現に一瞬ドキリッとしたが、トビ。ゆうゆうと飛んでいる。

木道のまわりの湿原には、ワタスゲ、ホザキシモツケの花が咲いてすばらしい景色だ。ホオアカ、カッコウ、ノビタキ、コサメビタキに逢いながら赤沼に到着した。

〔確認された鳥〕

イワツバメ、ゴジュウカラ、ヒガラ、シジュウカラ、ミソサザイ、コガラ、カケス、ヤマガラ、キビタキ、アカゲラ、ムクドリ、ハシブトガラス、カワガラス、トラツグミ、ククイタダキ、キセキレイ、マガモ、アオジ、ノスリ、ヒクイナ、ホオアカ、ノビタキ、スズメ、カッコウ、ビンズイ、トビ、ヤマガラ、エナガ、ホオジロ、センダイムシクイ、コサメビタキ、マミジロ、ウグイス、コゲラ、ニューナイスズメ、キジバト。（36種）

昭和57年度愛鳥教育研究会決算

1983. 3. 31

収 入		支 出		備 考
項 目	単 位：円	項 目	単 位：円	
会 費	278,000	印 刷 費	461,200	愛鳥教育7～9号 第6・7回研究会 会誌発送、その他 寄附は主に日本鳥類保護連盟より
研 究 会 費	479,000	研 究 会 費	444,330	
貯 金 利 子	6,910	通 信 費	70,120	
寄 附	237,847	消 耗 品 費	22,410	
前年度繰越金	32,680	次年度繰越金	36,377	
合 計	1,034,437	合 計	1,034,437	

意見交換会の記録

五日市町立戸倉小学校

梅本 登

総会終了後の意見交換会は、約30名が参加して行われました。話しあいは、たいへん活発に行われ、予定時間を1時間近く延ばしました。

主な内容は、年3回発行している「愛鳥教育」について「愛鳥モデル校の指定を受けたがどうすればよいか」「感想などの発表」などでした。

愛鳥教育誌について

愛鳥教育誌は、年3回の発行を予定し、現在、第9号(83.3まで)を数えています。これに対し、内容について「学校紹介の要素が多いのではないか」「素人が見ても分かるようなものを」「啓蒙活動のような内容のものを」という意見が出されました。

たしかに愛鳥教育研究会という性格上、学校紹介という傾向が見られることは、否定できないと思います。しかし、日本中の愛鳥活動推進校が、今、取り組んでいること、今、問題点としていることなどを互いに紹介しあうことは「広める」という面から、欠くことができないことだと考えます。そうして、事例をよく知る段階から、地域性、学校のようなすなどを考え合わせ、より質の高い活動を練り上げていってほしいと考えます。このことが、「素人にも分かる…」ということともつながるのではないのでしょうか。

内容をふり返ってみると、学校紹介以外にも、具体的な指導の参考になる記事もあるので、ぜひ参考にさせていただきたいと思います。

なお、「愛鳥教育」については、少ない予算の中で編集しています。このために日本鳥類保護連盟より多大なご援助をいただいていることを付記し、皆さまのご理解をいただきたいと思います。体裁などが堅いなどのご意見もありましたが、以上のことから、結局、会員を増やしていくことが、急務であると考えております。

愛鳥モデル校の指定を受けたが

山形県の北部中学校、斉藤隆先生から提案があ

り、これを中心に話しあいが進められました。

まず、中学校では、活発な活動をし、実績をあげている豊橋市立豊岡中学校の経験を皿井先生から紹介していただきました。

○クラブ組織で始めた。毎週の観察を1年間継続させた。それを文化祭などで発表。

○野鳥の絵、カード作り、カーピング。

○校内の野鳥を観察し、校内の活動を深めた。

○水質検査、水生昆虫などの観察も含め、自然保護へ目を向けさせた。

○アオバズク、ツバメなどの調査で、全校生徒に協力を依頼し、活動をもり上げた。

○野鳥コーナーなどを作り、広報活動を進めた。

次に、常務理事下田澄子先生から「先生のやろうとする意欲こそ大切である」という話が出されました。

愛鳥モデル校に指定されたり、それ以前の活動としては、その多くが、1人のマニア的存在の活動から出発していることが多く、それが、学校全体へ広がって指定校としての実績をあげる、という例です。指定校になり、組織がある程度形づくられた場合でも、中心になってやっていく、1人でもやろうとする意欲は大切です。

しかし、今、愛鳥モデル校の指定ということが愛鳥思想、自然保護の思想を「広める」「深める」ために行われるという形ならば、最低これだけはやろう、というパターンのようなものがあってもよいのではないかと思います。それについては、日本鳥類保護連盟の機関誌の「私たちの自然」に紹介されたこともあるので省略します。

最後に、山形県の斉藤先生には、愛鳥モデル校先進校から、少しでも、参考となる資料を送るようにする、ということを決め終了しました。

会員の方の中で余分な資料がありましたら、1部でけっこうです。北部中学校の斉藤先生宛にお送りして下さい。住所は、山形県西置賜郡小国町太鼓沢、北部中学校です。

愛鳥講座／愛鳥教育の計画 その1

愛鳥教育研究会常任理事

下田 澄子

はじめに

「愛鳥モデル校の指定を受けたが、どんな内容の活動を、どのような組織で、どういったやり方で行ったらよいのでしょうか」という悩みにしばしば出会います。

今までには野鳥と関連する活動が行われていなかったが、愛鳥モデル校の指定を受け、たまたま理科の担当にその計画が委任されたという場合。ずっと長い間、特定の教師が野鳥に興味を持っていて、野鳥の会などに参加し、自然から学ぶ素晴らしさ、野鳥の愛らしさを折にふれては子どもたちに知らせていた。そこへ愛鳥モデル校の指定があり、その人に学校全体の計画がまかされたという場合などあります。ともあれ学校全体でこの愛鳥活動に取り組む、その計画をとなりますと、なかなか簡単な問題ではないと思います。

先進校の例をみましても、自然環境には恵まれているが、何よりも指導する側の専門的な知識が足りないとか、逆に教育内容として受け止めたいが、対象となる自然条件がすでに身近な環境からは失われてしまった。また、学校自体実に毎日課題が多く毎年計画される教育内容は、真面目な反省をすればするほどその徹底について不備な点が出てきて、これ以上取りあげる内容、項目は増加してほしくない。さらに具体的に、野鳥とふれ合うその時間の設定が特にむずかしい、安全確保にも心配がともなうなどその悩み、問題点が特にそれを始める学校として大きな課題となっています。

しかし現在軌道にのってこの活動を推進しておられる学校では、以上のような問題点にとり組み実践を開始し、その困難点を乗り越える過程で、その学校にふさわしい活動を生み出しています。さらに学校全体地域をも含めて、子どもの教育のあり方について共通理解し、努力点を見出し、子ども自体も主体的な参加ができるようになってきている例が多いのです。

本研究会も、学習指導要領のねらいとする豊かな人間性の育成の一つの方策として、自然から学

んでいくこの愛鳥教育を育て、教育内容として理解されやすいものにし、同時に自然保護の思想の普及をはかりたいと考えています。

教育課程への位置づけ

ひとりひとりの教師の信念や努力は、子どもたちに、計り知れない足跡を残すものですが、また学校全体が組織をあげて取り組む教育は、およぼす範囲が広く、その成果も大きいといえましょう。

ですから教育課程における位置づけをどうするか、指導体制をどのようなものにするかは、大きな課題となっています。そしてまたそれらは、規模や環境、構成する人たちの考え方で、多様な方式となっていきます。したがって衆知を集めこの解決にせまるため、今はで研究成果を発表されている学校の教育計画、実践について、今回からご紹介していきたいと思っています。

自然環境に恵まれた小規模校の事例

「北海道倶知安町立比羅夫小学校」

(昭和55年の野鳥観察活動、同56年の野鳥観察記録によって記載します)

1. 学校規模とその環境

この学校は、へき地1級に指定された認可学級2の小規模校です。教職員数は校長を含めて4名事務補も校務補もいません。児童数は、1年3名2年4名、3年1名、4年5名、5年4名、6年4名、計21名です。(昭和56年度)

学校は、倶知安町の中心街から約5.5km南により国道5号線に面しています。前には羊蹄山、後にニセコアンヌプリを望む景勝の地で、二つの山の裾野が接するあたりに尻別川が流れ、また羊蹄山麓には、流れ入る川も出る川もない半月湖が深い林に囲まれ、千古の静けさをたたえ、野鳥に絶好のいこいの場を提供しています。ただしかし国道を走る車の激増、開発の手の広がりによる樹木の伐採、道路による林の分断など年々野鳥にとつてすみにくい土地になってきています。

2. 「野鳥保護に対する考え方」の中から

(1) より広い立場から「愛鳥」の意味と、その言葉に含まれている本当のねらいや願望を考えさらにこの学校の現状の中で、「何をなし得るか」ということを検討していきたいと思います。

(2) 現在の児童数から考えますと、巣箱設置や野鳥保護林管理の仕事を児童に要求することは困難です。したがって美しい自然と野鳥を守り続けようとする気持を育てるために、野鳥と自然と人間とのかかわり合いに目を向けていくことを大切にしています。たんに野鳥の美しさを見て感心するのではなく、生態の学習を通して生命保存のための野鳥の努力や自然の摂理を学び、野鳥と自然とを私たちの生活にまで広げて考え得る子どもを育てることをめざしています。そしてこれは、本校教育のねらいの中の「豊かな情操を育てる」ことに結びつき、同時に自然保護を願う心育てる道と考えられます。自然を愛し野鳥を愛する心は、やがて人を愛し、平和を望み、生命を尊ぶ心と通じています。

(3) 地域の特性を生かし、地域に根ざした教育をと考える時、羊蹄山麓に位置する本校にとっては、野鳥はよい教材です。教科書を越え、教室のドアからはみ出したところに、子どもの心を育てる教育がありました。

(4) 専門的知識を持つ指導者に恵まれず、目と耳と図鑑だけを頼りとして、小学生が野鳥をどの位識別し得るか心配でした。しかし、この困難も野鳥観察への意欲を引き出す段階的指導によってある程度解決してきています。新しい刺激に対する反応は、おとなより子どもの方がずっとするどくまじめです。あらゆる機会をとらえて対応させること、またそれを教師の研修や工夫によって、より効果的なものにしていくことに努力しています。

このように地域や学校の実態にたって、教職員の共通理解を得るための学校の考え方が明確にさ

れている点は、素晴らしいことであり貴重なことに思えます。構成員が目的をひとつにして初めて父母地域の人への対応も円滑に進められたことでしょう。計画立案にあたっては教職員全体のその受けとめ方や考え方を深める努力が大切で、人が多くなればなるほど、この必要性は高まるものと考えられます。

3 野鳥観察活動

(1) 活動の目的

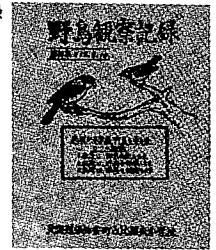
野鳥の観察を通して、豊かな情操を養い、野鳥保護、自然保護への関心を深め、あわせて生命尊重の心情育成に資する。

(2) 全体的な行事（昭和54年）

- 6月25日 探鳥会（小鳥の村、えん堤付近）
- 7月16日 探鳥会（小鳥の村、学校付近）
- 7月25日 野外活動はげみ表、はばたき発行。
- 9月25日 探鳥会（小鳥の村、学校周辺、半月湖）
- 9月29日 全校巣箱づくり
- 11月9日 探鳥会 巣箱かけ（半月湖）
- 2月6日 野鳥講演会 小樽市添田潤吉氏。
- 2月22日 巣箱の掃除、修理、巣箱かけ。
- 3月3日 巣箱かけ（学校周辺）

(3) 各教科、道徳との具体的な関連。

- 国語 観察記録文、生活文、手紙文、詩、日記文、説明文、物語、童話、発表、放送。
- 社会 森林資源と野鳥、渡りと地理や気候、公害と自然保護。
- 算数 巣箱、給餌台の作図や採寸。観察の際の高さ、距離、重さ、時間、位置、統計グラフ
- 理科 生物とその環境
- 音楽 野鳥を取り扱った曲
- 図工 描画（写生、記録）工作（巣箱、給餌台）デザイン（巣箱、給餌台、図表）



家庭 住みよい環境
 体育 探鳥会の山野歩行。がけ登り、体力づくり。
 道徳 生命尊重、責任感、自然愛護、創意工夫、愛校心、郷土愛

(4) 学年別観察指導のぬらい。

○1～2年

ぬらい 興味をもって野鳥を見ようとする。
 観察範囲 自分の家の周りの鳥。
 知識態度 よく見かける鳥の各前がわかる。鳥の細かなしぐさを見ようとする。
 技能 簡単な描写ができる。身近な鳥の鳴き声をまねられる。

○3～4年

ぬらい 観察した野鳥を資料で確かめようとする科学的態度を身につける。
 観察範囲 学校のまわりの鳥。
 知識態度 形、色、動作などに注意する習慣が身につくようにする。鳥の習性を調べようとする。それぞれの鳥と時期、天候などの関係を考えることができる。
 資料活用 図鑑や写真で確かめられる。

○5～6年

ぬらい 進んで野鳥の観察、分類、整理ができ、生態や自然との関係に着目できる。
 観察範囲 比羅夫地域の鳥。
 知識態度 似ている鳥も大体見分けられる。鳴き声である程度見当がつく。記録を整理して野鳥と自然環境との関係を正しく考えられる。「小鳥の村」の観察の充実と維持に努力することができる。
 技能 精密な描写ができる。口笛や手を使っていろいろな鳥の鳴き声を正確にまねられる。創造性を発揮して野鳥の好む巣箱

や給餌台など作ることができる。
 資料活用 図鑑、写真、テープ、フィルム、その他の資料を正しく活用できる。

(5) 観察活動年間指導計画

○1～2年

4月 自分の家の周りの野鳥と親しもう。
 5月 わかった鳥のようすを発表しよう。
 6月) 自分の家の周りの野鳥の名を10種類以上おぼえよう。
 7月)
 8月 自分の家の周りの野鳥の細かなしぐさを観察しよう。
 9月) 家の周りや、学校の周りの野鳥の細かなしぐさを観察しよう。
 12月)
 1月) 自分の家の周りの野鳥の名やしぐさについてまとめてみよう。
 3月)

○3～4年

4月 学校の周りの野鳥の形、色、習性について観察しよう。
 5月 観察したことをまとめて発表する。
 6月) 学校の周りの野鳥の形、色、習性について続けて観察しよう。
 7月)
 8月 学校の周りの野鳥について観察したことを図鑑で確かめよう。
 9月) 学校の周りの野鳥の習性について大まかな知識を身につけよう。
 10月)
 11月) 学校の周りの野鳥と天候、時期が関係することを考えようとする。
 12月)
 1月) 学校の周りの野鳥について観察したことを図鑑や記録を基にまとめてみよう。
 3月)

○5～6年

4月 比羅夫地域の野鳥を図鑑そのほかの資料を活用して調べよう。
 5月 くわしく観察したことを協力してわかりやすく発表しよう。
 6月) 発表後の問題点を整理し、継続観察をしよう。
 7月)
 8月 比羅夫地区の野鳥を鳴き声で大体

- 判断できるようにしよう。
- 9月) 比羅夫地区の野鳥を図鑑、資料、
10月) 鳴き声などに基づいて総合的に判
断できるようにしよう。
- 11月) 比羅夫地域の野鳥と自然環境との
12月) 関係に目を向けて考えようとする。
- 1月) 冬鳥や留鳥について観察し、記録
2月) を続けよう。
- 3月) 比羅夫地域の野鳥について観察し
たことを、図鑑、資料等活用して
まとめよう。

以上のように、この学校の場合、行事、各教科
道徳の関連事項、低、中、高学年別指導のねらい、
同じく観察活動年間計画が明確に示されています
が、その時間の設定などについては詳述されてい
ません。このことは、児童の作業面などについて、
以前よりずっと少人数になったため無理な点がで
てきていると指摘されていますが、反面、少人数
故にひとりひとりの活動が主体的になり、その指
導が個別的になっていると思われます。したがっ
てそれらは時間の枠を越え、生活の中にとけこん
で行われていると想像できます。またさらに言え
ば、体育におけるとび箱を使用する指導で、40人
学級と5～6名の学級とでは、特に時間のかかり
方が違ってくるといふ面があって、少人数である
ために徹底した指導が可能になるということも多
いと考えられます。

かつて北海道で「子供の自然と小鳥と鶴会議」
という子どもの研究発表会が釧路で開かれ、筆者
も参加したことがありましたが、野鳥のイラスト
を見て、かたはしからその名前を言い当てる子ど
もたちがいて驚きましたが、たしかそれが比羅夫
小学校の子どもと記憶しています。

以上これらのご計画から、いろいろと現実の指
導について教えられ、心から敬服いたしました。
自然環境に恵まれて、思いきり子どもたちと共に
自然に親しんでおられるごようすを羨ましく思い

ますが、同時に生活そのものの困難、先生方の日
日のご努力、ご苦勞がしみじみ偲ばれました。貴
重な記録を提供いただきましたことを心から御礼
申し上げます。なお誌面の都合で割愛させていた
だいたり、一部抜粋、要約などありましたことを
悪しからずおゆるしてください。

付 記

1、比羅夫小学校の愛鳥モデル校としての指定と 受賞の概略

- 昭和40年 8月 北海道より「愛鳥モデル校」の
指定を受ける。
- 同 47年 5月 本校「野鳥を守る会」が「北海
道自然保護団体」に指定された。
- 同 48年 11月 自然保護優秀団体として、北海
道知事、同教育委員会、北海道
放送KKより賞状を授与された。
- 同 49年 9月 鳥獣保護功労者として、北海道
知事より「北海道社会貢献賞」
の表彰状を授与された。
- 同 51年 4月 鳥獣保護功労者として、環境庁
自然保護局長より表彰された。
同じく大日本猟友会より表彰。
- 同 55年 10月 学研教育賞受賞

2、児童の観察記録

(1) ハクセキレイ 1ねん よねたひろき
となりのいえの、ほそどうろのところで、ハ
クセキレイがとまっているところをみました。

とってもかわいいので、すきになりました。
とまっているところを、はじめてみたので、こ
うなっているのかとおもいました。

しっぽは、たてからみるとふとくて、よこから
みるとほそくみえました。あるくときは、しっぽ
をばたばたします。

それから、いろは、くろ、しろ、きいろです。
くろは、からだのはじです。しろは、からだのま
んなかあたりです。きいろいくちばしです。

おおきさは25せんちくらいでした。



とびかたは、おおなみなみです。ほんとうに
なみのようです。

そらをとべていいなあとおもいました。

(2) ハクセキレイのかんさつ

2ねん なみかたなおき

ぼくが、どうしてハクセキレイのかんさつをし
たかという、色がきれいだからです。

色は、くびからはねのところがくろくて、はら
のところからしっぽの色は、しろとはいろがま
ざったいろです。しっぽの下のいろは、くろです。

しっぽは、セグロセキレイににています。から
だは、キセキレイににています。

大きさは、20センチぐらいで、なきごえは、ピ
ッピビとなきます。

あるき方は、しっぽを上下にうごかして、チョ
コチョコあるきます。とび方は、なみがたとん
で、下にむかってとぶとき、ピッピビとよくな
きます。

すはどんなところにつくるのかわからないので
みられません。ざんねんです。

もっとよくかんさつしていきたいです。

(3) ハクセキレイのかんさつ 4年 小西明美

わたしの大好きなハクセキレイは、よく家のな
やの屋根へとんできます。……まずはじめに鳴
き声ですが、「チチッチチッ」「ピイビビピイビビ」
「ピッピビビ」と三しゅ類の鳴き声を出すことが
わかりました。また鳴く時のようすですが、止っ
ているときも、とんでいる時もよく鳴きます。波
形にとんで下にさがる時に「チチッ」と鳴くよう
です。次に大きさです。スズメより少し大形で体
長は約21センチメートルあり、キセキレイは約20
センチで、ハクセキレイの方が少し大きいよう
です。次は、ハクセキレイの色です。頭とかがん線
のところと、あごから胸にかけて黒です。せ中の
ところは、はい色で、おなかのところは白っぽ
い。次にとび方です。はじめはねをひらいてと
び、次にはねをとじてとび、三、四は少しづつは
ねをひろげながら波形にとびます。図かんを見る

と、セキレイ科の鳥はたいい同じとび方をする
そうです。次に尾羽のふり方です。止っている時
しっぽを上下にふるくせがあります。…以下略。

(4) ハクセキレイ 5年 吉原真由美

ハクセキレイを観察しました。観察の動機は、
家の近くや登下校の時よく見かけるので、くわ
しく観察できるし、今まで観察してきた中でまだ見
落している点があるかも知れないと思ったからで
す。…(中略)…形態ですが、くちばしは黒く、
頭のと中から尾にかけても黒くなっています。頭
の部分は白色ですが、過眼線は黒です。体全体が
黒と白でいどろられています。メスはオスと違
いせ中の部分が灰色なのでオスとメスの区別が
つきまします。けれどもオスは冬になるとせ中が
はい色になります。体の長さは約20センチ、く
ちばしの長さは約1.2センチ、尾の長さは8.4
センチです。足の長さは2.2センチだそう
です。特徴は尾が長く体が細いのでスマートだ
ということです。

地面におりている時、たえず長い尾を上下に
ふり、警かい心が強く土をつつくたびに頭を
上げまします。尾をふらないでいることはめ
ったにありません。鳴き方は、「チチッチチッ」
「チュチュン」「フィッチャー」と鳴きま
します。……以下略。

以上発達段階で観察内容が変わるようすが
よくわかります。その多くの立派な作品が携
載されておりますので、いずれの機会にご紹
介いたします。

なお次回は、都会の中で愛鳥教育の計画
についてご紹介する予定になっております。

愛鳥講座／探鳥会とその計画

(財)日本鳥類保護連盟

松田 道生

はじめに

今まで野鳥の素晴らしさをわかってもらおうと色々なことをやってきました。講演会、映画会、展示会、写真展、そして野鳥そっくりのバードカービングの開発まで……。しかし、それぞれに良さもありますが野外へ出て野鳥を見たり、聞いたりしてもらうことには、とても追いつきません。

“百聞は一見にしかず”のたとえどおり、野鳥の良さは、自然の中で実物を見ることにまさるものではありません。たとえどんなに素晴らしい企画の展示会もあくまでバードウォッチングの擬似体験にすぎず、蛍光灯の下でのものまねは、太陽の元での実体験にはとうていかなわないのです。

そのようなわけで学校内での愛鳥活動のみならず、サークルや市民団体の催す探鳥会がさかに行われるようになりました。ここでは探鳥会のやり方を、具体的な例をあげながら解説していきます。

探鳥会の歴史

今、鳥を見る会を探鳥会と書いてしまいました。これは最近できた言葉で「広辞苑」には載っていません。といって昔の人は見ていなかったわけではなく、万葉の歌人たちも、江戸時代の俳人たちも私たちよりずっと素晴らしいバードウォッチングをしています。

近代に入って初めての記載は、昭和5年5月25日の「生き物趣味の会による富士山鳥類視察旅行」で、これは日本鳥学会の会報「鳥」に報告されています。この当時は「野鳥の状態を見る会」などなかなかネーミングに苦労している報告がみられます。

そして昭和9年5月の「日本野鳥の会」の発足と同時に第1回の探鳥会が富士の須走で開催されました。実はこれも初めは「野鳥見学旅行」となっていたのですが、後で「探鳥会」と呼ぶようになりました。

今では、バードウォッチングといかにもスマー

トな呼び名まであります。また、日本鳥類保護連盟では鳥だけでなく自然も見ようということで、「自然観察会」といっています。ここでは、消エネのため字数の少ない「探鳥会」で話を進めますが、後で述べるように鳥だけを見るものではありません。

探鳥会の意味

さて、探鳥会を企画した人も、普及に尽力された方々も、もちろん自然大好き野鳥大好きということで行って来たわけで、これには自然を守りたいという気持ちが強くあります。

探鳥会の始まりは、中西悟堂さんが、そのころ、いや今でも残る野鳥の飼育に反対して野外で鳥を見ようと提唱したのがきっかけです。そして、それを自然観察会として高めた金田平さんや柴田敏隆さんたちの三浦半島自然保護の会では、植物や昆虫採集に反対して、野外観察の方法を実践して来ました。

別な言い方をすれば、今までの自然との接触は採集しコレクトすることから始まっています。たとえば、潮干狩り、ホタル狩り、紅葉狩り、山菜とり、魚釣り、そしてハンティングといったレクリエーション。さらには、学校教育の中では昆虫採集、植物採集、その標本作りというのが定石でした。

自然が豊かであった古き良き時代はまだしも、現代のように自然が大規模な開発や大挙して訪れる観光客によって破壊されているなかで時代おくれの行為といってもよいでしょう。

そして、生命を大切に、生き物を可愛がる子供たちを育成していくことが、私たちが進めている愛鳥教育の目的のひとつでもあります。これは他人に対する思いやりや人間性あふれる人間づくりにもつながります。

現在のような自然破壊も校内暴力もこれら情操教育の欠如に起因していると断言する先生もいます。さて、採集行為や標本作りからこれら情操部



分の教育をおこなうことができるのでしょうか。

その意味からもあくまで探鳥会とは、自然の中にある野鳥を自然のままに、驚かしたりおびやかしたりすることなく観察することです。これが楽しみになり、科学的興味を満足させるものになれば、それにこしたことはありません。

このような考えが1960年代の後半に盛り上がった自然保護運動の中で、採集をしない野鳥の会のメンバーが人口的に、多い植物や昆虫の愛好者をぬいて運動の中心になったこと、そして冬の時代を迎えたといわれる自然保護運動史の中で、今なお彼らが活躍していることのバックボーンだと思います。

探鳥会の種類

探鳥会は、バードウォッチングのブームとともに各地で開かれています。一番多いのは、日本野鳥の会の本部、支部が主催する探鳥会です。多くの支部が、毎週日曜日に開催しています。また本部は愛鳥週間などに大規模な探鳥会を企画します。

いずれも日本野鳥の会の本部と支部に入会するとインフォメーションが受けられます。

この探鳥会は、大きく分けて会員外の初心者を対象に行うものと、加入した会員を対象としたものになります。前者は愛鳥週間などに行われる大規模なもので、リーダーがついて詳しく鳥を教えてください。後者は会員が野鳥を楽しむ点に重きが置かれている場合が多いので、ボンヤリしていると誰も鳥を教えてくださいません。自分が初心者であることをまわりに表明するか、リーダーについてずうずうしく教わりましょう。また、参加費は200円程度（宿泊の場合はほぼ実費）ですから経済的負担も少なく、子供たちをつれて参加するのも気が楽です。

次に行政が主催するもの。県の自然保護課や公民館、博物館などが実施するもので、地元根づいた活動です。ただ不定期なので公報や、新聞に載ったものを見落とさないようにしなくてはなり

ません。また参加費はたいがい無料か安いものです。運が良ければ、お土産がもらえます。子供をつれて団体で参加する場合は、前もって了解をとっておいた方が良いでしょう。それなりに対応してくれるはずですよ。

リーダーはたいがい地元の団体から手伝いに来ているのが普通ですから、今後のスケジュールを講師を通して教えてもらっておきましょう。

このほか、業者が企画したものがあります。たとえば、旅行会社やカルチャーセンターなどが企画したものです。たいがい団体が後援か指導にあたり、一流の講師をそなえているのが特徴です。また、これは1泊以上の宿泊を兼ねていることもあり経費が高いのが難点です。ですから子供たちを連れて気楽にとはいきませんが、じっくりプロの話を聞けますから、そっと技術をみがくには良い機会です。

もちろん、このほか当会の主催する研修会もあります。会員である以上1回ぐらいは参加して下さい。

探鳥会の計画

さて、リーダーのあなたが、これから探鳥会を企画する場合のヒントを段階を追って説明していきましょう。

まず、計画では、何を見るのか、見せるのかポイントをはっきりさせることが大切です。それにより、場所、日時、コース、集合時間、リーダーの人数などが決まってくるわけです。

鳥についてはどんな鳥を見に行くのか。たとえば、森林の鳥、草原の鳥、河川の鳥、干潟の鳥など、環境に合わせて鳥の種類が決まっていきます。多くの探鳥会は、短い時間に多くの種類を見たり、珍しい種類を捜すことが目的になっています。しかし、1種類の鳥や、ある環境に生息する鳥たちをじっくり見る企画の方がより教育的です。

たとえば1種類の鳥を観察する企画では「ムクドリ」のネグラを見る会」。ムクドリは、秋から冬に

ネグラを作り、夕方日が沈むころネグラに集まって来ます。これを、早目にいって待ちかまえていれば、空が真っ黒になるほどのムクドリの大群れが、真っ赤な夕陽をバックに舞うドラマが見られるわけです。

関東では越谷の御猟場が有名で、北から渡って来た群れが合流する秋は巨大な群れになります。

または「オオヨシキリの囀りを聞く会」。これはアシ原にいるオオヨシキリを土手の上からじっくり見るもので、草原を渡ってくる風の中でオオヨシキリのジャズを聞きながら草原の鳥を観察します。ソングポストやケンカからオオヨシキリのなわばりを地図に書いて見ることもできます。

このほか、ウミネコの繁殖地、シラサギ類のコロニー、サシバの渡りなどがあげられます。

こういった企画は特に初心者向けであり、初心者はいっぺんに何種類もの鳥はおぼえられませんので、基本的なものをしっかり解説した方が、鳥を知る早道です。もちろん、ムクドリを見にいったってほかの鳥も出るわけですから、たった1種だけだったということにはならず、ポイントとした鳥については、ぜったいに忘れない印象を与えるわけです。

環境と鳥を見る

もう少し広げた企画では、環境をポイントにした探鳥会です。たとえば、池のカモ、河口のカモメ、干潟のシギ・チドリ、森林の小鳥といったように、環境によってしぼり込む方法です。ここでは、姿や声を聞いてただ名前をおぼえるだけでなく、鳥たちとすんでいる環境の違いをよく見てみましょう。

たとえば、冬の池では池の中央と池のふち近くにいるカモの種類が違うはずですが、アシ原や木が生いしげっている所があればもっと別の種類がいて変化があるはずですが。これは主にエサとエサの採り方によってすむ場所がちがうのです。潜水して小魚や貝をとらえるキンクロハジロやホシハジ

ロは深い所、池の中央です。あるいは海までエサをとりに行くので池の中では安全な中央で寝ている場合があります。首を水の中につっ込むだけで水草などを食べるマガモやオナガガモは浅いところ、池の岸に近いところが好きです。アシがあればカルガモが良くいます。泥っばいところはハシビロガモ、林がおおいかぶさっている水面はオシドリが好きです。

草原では、水の多いところ、林のそば、草の丈など環境の違いと、いる野鳥の種類を調べてみましょう。いずれも見晴らしのよいところなので、しばらく見ていれば、その傾向をつかむことができます。

また、森林ならば、人家のあるところ、溪流、林のまわり、林の中心、といった環境の違い。針葉樹、広葉樹、照葉樹の多いところと樹の種類による違い。さらには標高による違いも大きな要因です。長いコースを歩きながら出現した鳥を地図にプロットして見るとよくわかります。

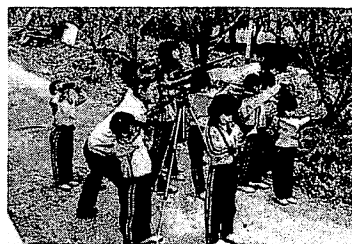
以上は大きな環境の違いでしたが、ミクロな環境、たとえば1本の木でも鳥によっているところが違います。木の頂はオオルリやアオジ、ホオジロの囀りのポイントです。幹はアカゲラ、コゲラなどキツツキ類のエサをさがすところ。中層木は、キビタキやコサメビタキの好むところ、地面はアカハラやトラツグミのエサをさがすところ。ブッシュは、コルリやウグイスです。

どんなところに何という鳥がいて何をやってたか、これが観察のポイントで鳥たちの生活の範囲とくらしぶりがよくわかります。

このような観察の方法は、鳥と自然のむすびつきが良くわかるだけでなく、エサのとり方、求愛行動など鳥たちの行動を見落とすこともなく、より野鳥に親しむことができます。

対象とする人

計画の中で誰を対象にするのかも大切なポイントです。おそらくここでは初心者を対象にするリ



ーダーが多いと思いますので、初心者を中心に話を進めます。

対象となる人、参加者がどのレベルなのか、前もって知っておく、あるいは対象をしばって計画する必要があります。たとえば、ベテランで若い人、健脚な人が多ければ、たくさん歩いて多くの野鳥がみられるようなコースがよろこばれますし、好きな人たちばかりでしたら勝手に見えていますから、それほど指導をしなくて済みます。

もし、募集で初心者にしばれるならばって参加者のレベルを一定に保っておいた方がきめの細かい指導ができます。本当に鳥に詳しい人がまじっていれば手伝ってくれますが、なま半かの知識のある人が入っているとやりにくいものです。

さらに小学生などの児童が多い場合、リーダーの人数に余裕があれば子供担当と野鳥指導担当を決めておくことが必要です。できたら親子探鳥会とし、子供の面倒は親に責任を持ってやってもらえれば、親子で野鳥ファンにすることもできますから一石二鳥です。

このほか、あらゆる計画は、参加者の程度、子供、女性など弱いものにレベルを合わせて計画すべきでしょう。

コース

コースも目的によって取り方が違います。もし少ない時間で多くの鳥を見ることを目的にするならば、コースの途上にいろいろな環境が入るように計画すれば良いでしょう。

初心者向きのみならず探鳥に適したコースのポイントは楽な道であることが大切です。山登りが目的ならば急峻な道が良いのですが、探鳥をしながら歩くにはゆるやかな道の方が見やすいわけです。参加者はリーダーが見つかる鳥を見れば良いのですが、リーダーが山歩きに労力をとられると鳥を見つける能力がおちてしまいます。

また、コースにかかる時間もたっぷりとしておくことが必要です。ハイキングのガイドブック

に載っている時間の2～3倍もかかってしまうことがよくあります。これは、鳥を捜しながらゆっくり歩くことと、たとえば30人の参加者で1羽の鳥が止まっているのを1人1人見せるならば1人20秒かかったとして10分もかかります。また、行動や生態などを観察するならなおさらです。

愛鳥教育研究会の日光研修会では、戦場ヶ原の湯滝→赤沼コースを5時間かけて歩きます。実はこのコース、ガイドブックでは1時間半なのです。それだけにいつも修学旅行で歩いている先生方も、こんなに鳥の多いところだとは知らなかったと、おどろいておりました。

コースの中に、展望の広いところをポイントとして入れておくことも大切です。特に対象が初心者の探鳥会ならば、テーマも池のカモ、河口のカモメ、干潟のシギ・チドリ、草原の鳥など開けた場所にいる鳥を教えるのが早道です。また、森林では、展望台や頂上などでゆっくり望遠鏡をつかって木の梢で囀っている鳥を見られるようにしましょう。

そうすれば参加者ひとりひとりが鳥を見たという実感をえて終わることができます。また、ゆっくりと図鑑と照らし合わせて見ることもできます。そうでないと比較的鳥の多い高尾山でも30人位の初心者を指導すると、1,2人ぜんぜん鳥がみられなかったと文句をいう人がでできます。

季節

野鳥の最も良いシーズンは、誰だって森林の小鳥たちがコーラスをかなでる5～6月を挙げることでしょう。しかし、ゆきとどいた指導ができる良いシーズンは秋から冬です。というのは、身近で探鳥会の開催できる平地は、冬鳥と山から降りてきた漂鳥で数が多くなります。このほか、カモ、シギ、チドリなど開けた場所を好む鳥たちが群れを作っていることも参加者全員に鳥を見せることができるチャンスです。また、森林も葉が落ちて、鳥が見やすくエサ場（実のなる木）、水場など鳥が

集まる場所が決まってくるわけで、ポイントさえおさえておけば、鳥を見せやすいシーズンです。

ただし、真冬は寒いばかりで初心者にはきついかも知れませんので、はじめは秋の行楽シーズンに探鳥会を企画するのが良いでしょう。日本野鳥の会がバードウォッチング週間を11月にもうけたのもそういった理由があります。

また、愛鳥週間は、PR効果のもっとも高いときなので、広報活動としては最適の時です。またムードも高まっていますので参加者も多く、効率のよい探鳥会を開けます。森林もまだそれほど茂っていませんし、シギやチドリの渡りのシーズンでもあります。この期間中には、外にむけての探鳥会をいずれは企画してみてください。

学校のまわりだとか、1ヵ所ホームグラウンドを決めて探鳥会を開くことができるのでしたら、年最低4回は実行してほしいものです。そうすれば四季によって鳥たちの顔ぶれが異なるのが良くわかります。できたら、隔月とか毎月とか回数を多く同じ場所でやれば、もっと季節のうつりかわりがわかりますし、グラフなどに表現しやすいデータが得られます。

また、環境によって最も良い季節があります。ベテランになればどんな季節でもどこでも鳥を見つかけられます。しかし、環境によってベストシーズンは変わりますから初心者向けの探鳥会では一番良いシーズンに一番良いところを選んであげましょう。

日 時

探鳥会は日曜日に開かれることが多いのが普通です。当然一般の人が参加するには休みのとりやすい曜日ではなくてはならないからです。しかし、小学校や主婦を対象にするならば、かえって土曜日や平日の方が参加しやすくよこばれます。平日のほうが、探鳥地も交通機関もすいていますから移動も楽です。また、月はじめから中旬の方が一般の人は比較的ヒマなので月末をさけて企画し

た方が参加者が多いでしょう。

このほか、梅雨どきは雨天中止になることが多いので、雨の日の探鳥会が目的でないかぎりなるべくさけましょう。天候については、その地方の地元气象台から発表されている天気の良い日を選んで決定するのも一考です。

探鳥の時間は、朝早い方がより良い場合がたくさんあります。夏の森林の小鳥ならば、午前3時ごろから活動を始めると、夜の鳥から朝、昼の鳥へと変化していくのが良くわかります。冬も水場に鳥がやってくるピークは、まだ水たまりの水が凍っているところ、夜明け前からです。このほか、ガンのネグラ立ち、スズガモのネグラへの帰還も朝日とともに見られます。どうころんでも朝寝坊できないのがバードウォッチャーの宿命です。

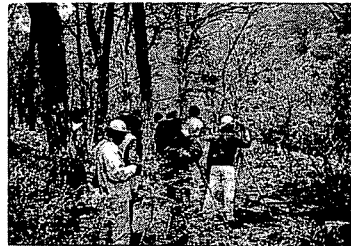
こういった企画の探鳥会ですと、泊りがけか、夜行列車でいって夜中か早朝につくスケジュールを計画しなくてはなりません。

ただし、シギやチドリなどの干潟にいる鳥は、潮の満ち引きに大きく影響されます。場所によって違いますが、普通潮が引いて干潟が大きく出ている時に現場について、潮が満ちてくるにしたがって陸に近づいてくる鳥を観察するようにスケジュールがとれると最高です。

今までの探鳥会は、ある程度鳥が好きになってしまった人のもので、多くの初心者には、たくさん鳥に逢うより、いつもみられる基本的な種類を良い環境の中で見てもらい、まず野鳥になれ親しんでもらうことが目的ですから、それほど集合時間を早くする必要はないでしょう。

学校などで主催するのでしたら、いつもの始業時間と同じくらいで良いでしょう。例外としては夏休みなどにかんがって早く集合し、いつもと同じコースを歩いて見れば、新しい発見にめぐり逢うかもしれません。

前述のムクドリやネグラを見るためには、夕方の集合が良いので土曜日の午後にも計画できる企画です。



集合場所は、わかりやすい場所にこしたことはありません。集合場所は探鳥コースの基点であり、泊まりがけの企画でなければ、鳥のいるところまで近い方が良いのです。というのは、鳥の見えるところまで、そこから黙もくと歩くようなことになると、始めからダレてしまいます。少し歩くとすぐにも身近な鳥が出てくれるくらいの方が、初心者的心をつかみやすいものです。

集合場所には、リーダーが旗を持ったり、腕章を見て目立つようにしておくことも大切です。

解散時間は、夕方までに終わる時間にするのが理想的です。いつまでもダラダラやるよりは、あるところできちっとしめて、あとは自由にさせる方が良いでしょう。特に親子探鳥会など主婦の多く参加する会は、早目の解散がよろこばれます。そして、もっと見たい人は、その後も見ていれば良いわけで、一回解散しておくことです。

解散場所は、帰るのに利用する交通機関に近い方が親切です。最終解散場所を駅やバス停にすれば道案内もしないですみます。

指 導 者

探鳥地と天候のよしあしもさることながら、探鳥会が成功するか評判が悪くなるかは、指導者の能力に多くかかっています。

リーダーは鳥の知識はもちろんのこと、そのほかの動植物、自然、そしてなによりも自然保護に対する認識がなくてはなりません。そして、これらの知識以外に、大切だと私が思うのは、人間的魅力です。よくあるパターンで、出てくる鳥の名前はたしかに正確に識別しているのですが、それ以外のことになるとまったくダメというタイプは、リーダーとしては失格です。

また、自分は鳥を知っている。それを教えてやるのだとばかり知識をおしつけて、指導するよろこびにひたっているリーダーには辟易いたします。自戒も込めて、申し上げております。

さて、いずれにしてもリーダーは、勉強して鳥

や自然に関する学問を深めておかななくてはなりません。さらに、指導するテクニックも、教室などで行うものと野外でのテクニックは勝手が違い難しいと思います。これに関する良き指導書は少ないので、やはり先輩リーダーの方法を盗むしかありません。あとは場数をふんで体でおぼえていくことでしょう。

詳しい方法は、実践のところでまたふれますので、ここではこのくらいにしておきます。

参加者に対するリーダーの人数も場合によっていろいろです。1人が普通指導できるのはせいぜい20~30人です。また、人数が多くなると鳥を追いはらって歩いているようなものですから、この範囲内におさめ、多ければ班わけして別コースを歩くようにしましょう。

できれば、10~20人に1人のリーダーと助手がいれば理想的です。リーダーが先頭をつとめ、助手が、一番後を見て落ちこぼれないようにチェックしていきます。また、2人いれば1人で見落とすようなことも、4つの目でカバーして、見落としを少なくすることができます。

探鳥会は、野鳥の素晴らしさを知ってもらうのには、もっとも理想的な方法です。また、初めの探鳥会の印象によって、初心者の参加者がファンになるかどうかまします。たまたま、理想的でない探鳥会に参加し、こんなものなのかとって野鳥からはなれてしまった人の話を時々聞きます。1回1回の探鳥会がうまくスムーズにいけばもっともっと野鳥ファンが増えて、さらに自然に対する認識が深まり、自然を大切にする人が増え、自然が保護され、住みやすい環境になるはず。探鳥会は、生きた教育活動ができる良いチャンスでもあります。

愛鳥モデル校指定数

1983年4月現在

	愛鳥モデル校				学校数に対する比率(%)			
	小学校	中学校	高校	計	小学校	中学校	高校	計
北海道	32	12	0	44	1.8	1.5	0	1.5
青森	1	2	1	4	0.2	0.9	1.1	0.5
岩手	11	15	0	26	1.9	6.2	0	2.9
宮城	12	19	0	31	2.6	8.9	0	4.0
秋田	12	5	0	17	3.3	3.3	0	2.9
山形	12	4	0	16	2.8	2.6	0	2.4
福島	9	9	0	18	1.4	3.6	0	1.8
茨城	14	5	0	19	2.4	2.4	0	2.1
栃木	7	0	0	7	1.5	0	0	1.0
群馬	14	4	0	18	3.8	2.2	0	2.8
埼玉	13	8	1	22	1.6	2.2	0.5	1.7
千葉	11	5	0	16	1.4	1.5	0	1.2
東京	28	8	0	36	1.9	1.0	0	1.3
神奈川	13	5	0	18	1.6	1.2	0	1.2
新潟	29	10	0	39	3.7	3.4	0	3.2
富山	8	1	0	9	2.9	1.1	0	2.1
石川	10	0	0	10	3.1	0	0	2.0
福井	14	3	0	17	5.3	3.5	0	3.4
山梨	13	4	0	17	5.5	3.8	0	4.4
長野	26	9	0	35	6.0	4.7	0	4.8
岐阜	7	4	0	11	1.5	2.0	0	1.5
静岡	20	9	0	29	3.7	3.2	0	3.0
愛知	23	14	0	37	2.4	3.7	0	2.4
三重	9	3	0	12	2.0	1.6	0	1.7

〔注〕この資料は昭和58年4月現在の愛鳥モデル校の指定状況を各都道府県の鳥獣保護担当課に文書で回答をえた数字である。左の欄にはモデル校の実数。右の欄には全学校数で割った%を示している。愛鳥モデル校は環境庁のたてた「第5次鳥獣保護計画」の中で40校に1校の割合で指定するよう通達されている。これは、2.5%で、

	愛鳥モデル校				学校数に対する比率(%)			
	小学校	中学校	高校	計	小学校	中学校	高校	計
滋賀	12	4	1	17	5.0	4.6	2.0	4.5
京都	4	2	0	6	0.8	1.0	0	0.8
大阪	3	0	0	3	0.3	0	0	0.2
兵庫	12	6	0	18	1.4	1.6	0	1.3
奈良	25	15	0	40	8.9	14.7	0	9.2
和歌山	23	5	0	28	6.1	3.2	0	4.8
鳥取	7	1	0	8	3.6	1.7	0	2.8
島根	3	3	0	6	2.4	5.6	0	1.2
岡山	12	6	0	18	2.4	3.2	0	2.3
広島	6	2	0	8	0.9	0.8	0	0.7
山口	6	0	0	6	2.9	0	0	0.9
徳島	8	3	0	11	7.8	5.5	0	2.4
香川	3	0	0	3	1.4	0	0	0.9
愛媛	12	4	0	16	7.0	5.6	0	2.4
高知	11	5	0	16	3.1	3.2	0	2.9
福岡	22	7	0	29	2.8	2.1	0	2.3
佐賀	6	6	0	12	2.9	6.1	0	3.4
長崎	0	0	0	0	0	0	0	0
熊本	14	0	0	14	6.2	0	0	1.6
大分	13	5	0	18	3.1	3.0	0	2.7
宮崎	36	8	0	44	12.3	5.4	0	8.8
鹿児島	13	3	0	16	2.1	1.0	0	1.6
沖縄	2	1	0	3	0.8	0.7	0	0.7
合計	601	244	3	848	2.4	2.3	0.05	2.0

義務教育課程のみで 895校なければならない。(高校も入れれば、1025校) 指定校は都道府県によって方針はまちまちで、少数先鋭のところ。大量に指定に広く普及させているところなどあり、一概に評価できない。ただし平均以上はあってほしいし、目標数をめざして努力してほしい。

愛鳥活動のヒント・2

(財)山階鳥類研究所資料室長

柴田 敏隆

聞きなし

ウグイスをなぜ「ホーホケキョ」としか聞かなければいけないのだろうか、ということにふと疑問を感じて、それならば、あの声を何と聞きなすかを考えてみた。それが意外に難しく、どうしてもホーホケキョに落ち着いてしまうのである。先入観というのは恐ろしいもので何と硬直した石頭であろうと、握りこぶしでわれとわが頭を叩いてみた。そこで、子供たちはどうかな、とためしにキャンプ場でめざめたばかりの男の子に聞いてみた。「ねえ君キミ、あの鳥なんて鳴いてるの?」「えっ!あれはね、モーオキロツて鳴いているのだよ、夕方は、モーネナサイツて鳴くの」当意即妙、まったくお見事、私は啞然として開いた口がふさがらなかった。子供って何と自由闊達なのだろう。

鳥の鳴き声を、私たちの日常の言語になぞらえて、そのアクセントやイントネーションを取るのを聞きなしという。ホトトギスの「テッペンかけたか」「特許許可局」ツバメの「土喰って虫喰って洪一い」ホオジロの「一筆啓上仕り候」などは古くから人々にいわれている。センダイムシクイを私共は「焼酎一杯グイー」とか「爺や爺や起きい」とか教わったが、今の若い人は、「チカレタビー」最もナウイのは「千代の富士い」と聞く。「鶴千代君い」(先代萩の)などは注釈がつかなければ、意味がとれないであろう。

聞きなしは、鳥の鳴き声を覚えるのに確かに意義はある。特に、初心者に教示するのに効果はある。しかし、メジロは決して「長兵衛忠兵衛長忠兵衛」といった単純な鳴き方をしているのではない。「聞きなしコンクール」などは、余興としては面白いけれど、あまり深入りしすぎて、本質を見失うと、VTR、トラペン、16ミリ映画だけの映像教育が陥る恐るべき代償経験学習と同じ轍を踏むことになろう。

シンボルバード

未開?の狩猟民族などに多い族霊崇拜的に自分のトーテムとなる鳥を各人が持ったらいかがだろう。つまり国鳥や都道府県の鳥があるように「自分のシンボルバード」を決めるのである。かく申す私は、つとにシジュウカラとフクロウを私のシンボルバードに決めていて、ネクタイ、バッジ、ペンダント、ワッペン、文鎮、灰皿その他日常のありとあらゆるもろもろをこのシンボルに結びつけるのである。

シジュウカラは「我が懐中はじじゅうから」という私の日常経済性につながっている。これを言うとき皆さん微笑して、話の糸口がほぐれるのである。フクロウは、夜になると目がらんらんと輝き元気一杯、鼻歌を歌いながら原稿を書いたりするノクターナルな私の生活リズムにぴったり合っているのである。だから近くの森で、アオバズクでも鳴こうものならば、深夜の庭に飛び出て、負けじ劣らじと「ホッホッホッホッ」をやって、友好和親の情を交わすのである。

そのかわり、自分のシンボルバードについては知悉していなければいけない。そうでなければ、シンボルバードを戴く資格がない。

シジュウカラが1年間に食べる虫の数は? フクロウの網膜1cm当たりのロッドの数は? など普通の人知らないような事を知っていなければいけない。少なくとも知ろうと努力しなければいけない。これが、大変勉強になるのである。

愛鳥モデル校で、学校、学年、級毎にシンボルバードを決めている所は多い。それを「自分の鳥」にまで昂めて、わがシンボルバードの自慢大会をコンクール形式でやったらどうであろう。ただし極北のヘヤーインディアンのように、他人のシンボルを決して、けなしではいけない、というルールは厳守しよう。

皆んで作ったマイホーム

青梅市巣箱コンクールを見学



東京の青梅市役所は、毎年巣箱コンクールを愛鳥週間中の行事として実施しています。そして今年なんと25回、初期のころコンクールに参加した子供たちはもう立派な大人。もしかするとその子供が参加しているかもしれません。

実は、コンクール、愛鳥教育研究会の田村活三会長が、青梅第4小学校の校長時代に提案し今にいたったわけです。さて、今回私が見学させていただいたのは、各学校をまわっての巣箱集めと審査です。

まず訪れた青梅第4小学校では、巣箱が体育館の演台の上にずらっと並んでいました。その数は114個、壮観です。どれひとつとって見ても子供たちが一所懸命作った作品であることは良くわかります。涙をのんで審査員の日本野鳥の会奥多摩支部の人たちが選んでいきます。

こうやって集められた巣箱は青梅市民会館の会議室で最終審査を行います。審査員は支部の人たちに加え、田村会長、青梅市の農林課の方々で一

つ一つ作品をていねいに見ていきます。穴は大きすぎないか、深さは適当か、ひさは長いか、ヌメの穴は開いているか、作りは頑丈かなど、チェックポイントを見ていきます。

特賞は新町小学校4年の吉野晴子さんの作品。しっかりした作りはもとより、木の皮でまわりをおおい、それをタケでていねいに止めています。これは文句なくすぐ決まりました。

楽しいのはアイデア賞。木の枝で丸太小屋のように作り、ダミーのドア、もちろん取手までちゃんと付いています。まるでおとぎばなしに出てくるようなムードです。

このほか、金賞、銀賞、銅賞、努力賞、などの賞を決めました。このコンクールに参加したのは11校で、492個の巣箱が集まり120個が入賞しました。これらの入賞作品は、愛鳥週間の間、市民会館に展示され、多くの方々に見てもらうことでした。

夏季研修会のお知らせ

編集後記

例年どおり、東京の御岳山で夏季研修会を開催します。日本鳥類保護連盟による鳥類に関する講演、愛鳥モデル校で活動されている教育による研究発表、探鳥会などを予定しております。どうぞふるってご参加下さい。

日時：昭和58年8月11日、午後1時集合

12日、午前11時30分解散

場所：御岳山ビジターセンター（電話：0428-78-9363）、国鉄青梅線、御岳駅下車、ケーブル滝本駅までバスで10分。ケーブル御岳山まで8分。ビジターセンターまで一本道で徒歩10分です。

申し込み：7月30日までに参加費をそえて連盟まで申し込んで下さい。

参加費：6000円（宿泊費、資料代含む）

●愛鳥教育研究会も4年目をむかえなんとかやるのがわかって来たような気がします。まずは、情報交換。活動の実践例はもとより専門知識までこれにはいろいろあると思います。本誌を通じてまずは交換の場ができたと思っています。というわけで原稿を募集しております。特にメ切はなく紙面の都合で順次、掲載しています。よろしくお願ひしま〜す。●日光研修会にて「あの、上にのびた木に止まっているのがノビタキです」（m）●“愛鳥教育誌”通巻10号まずはおめでたい。とは言うものの、まだまだ当研究会はマイナーの域を出ていません。もっとビッグに、そしてメジャーになるには会員の増強です。本当なら全国の先生方が参会なさるのが理想的ですがね。夢ですかね。でも夢だけで終わらせないように……。 (ムネ)